源流

茶湯綱目 三

468

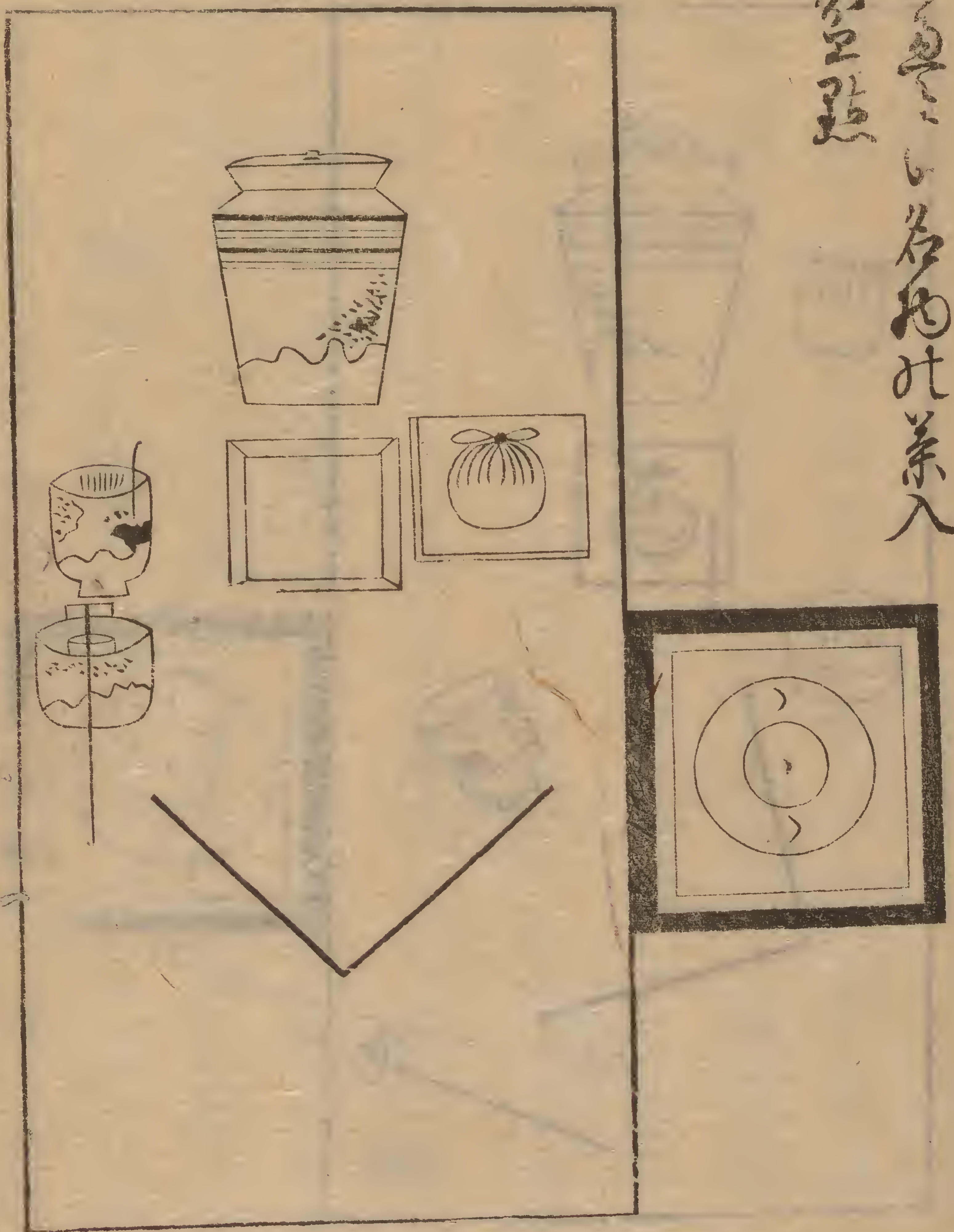
茶之湯綱目　三之巻目録

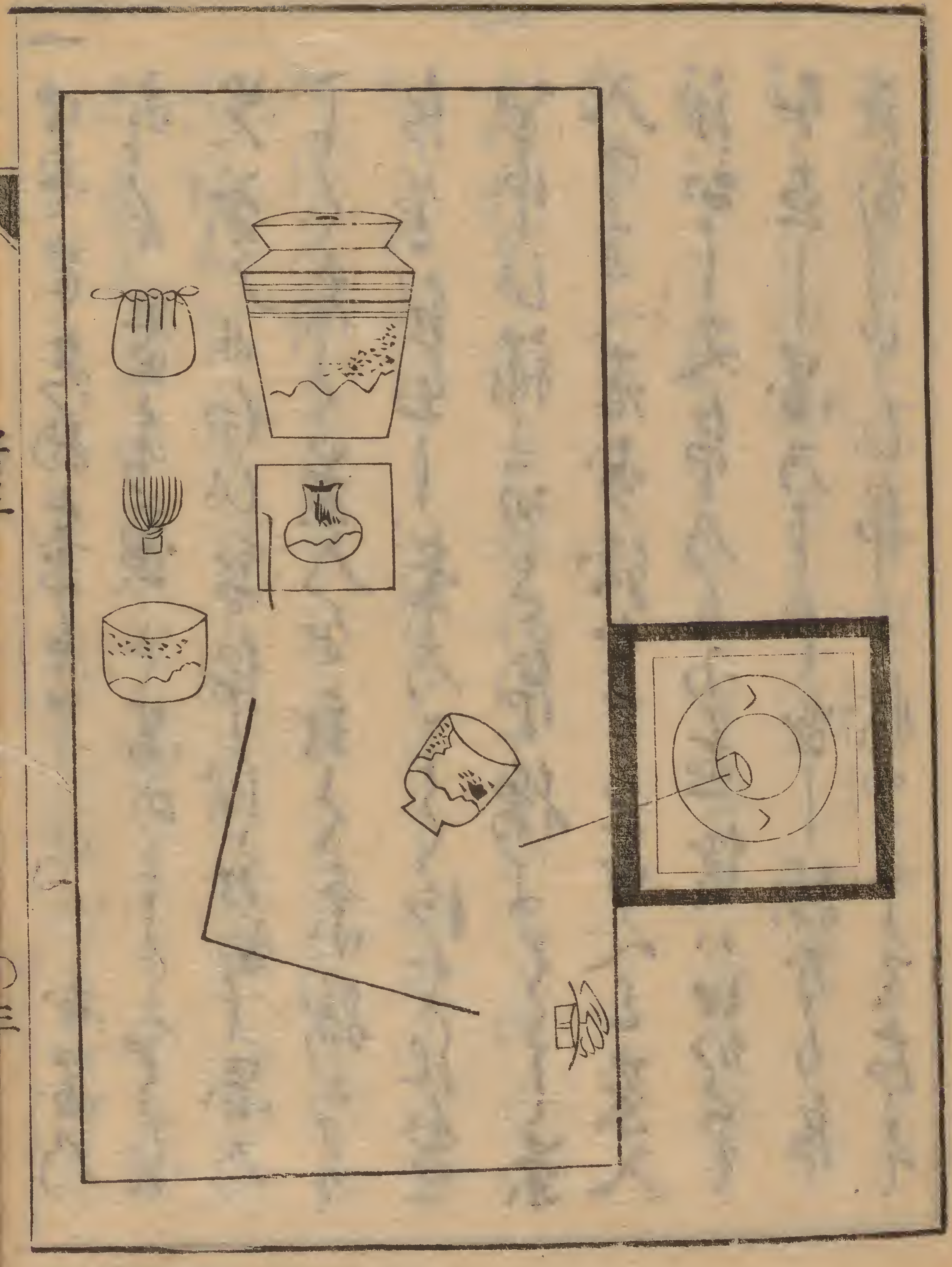
四疊半先扱茶入盆點
真の臺子兩漢の盆點
松の木盆并御成の盆點
御成銅鐵臺子封改水定の習
貴人ト湯ト儀之習
茶籠點上段之習
茶籠點中段之習
茶籠點下段之習
長板風炉臺茶碗點習

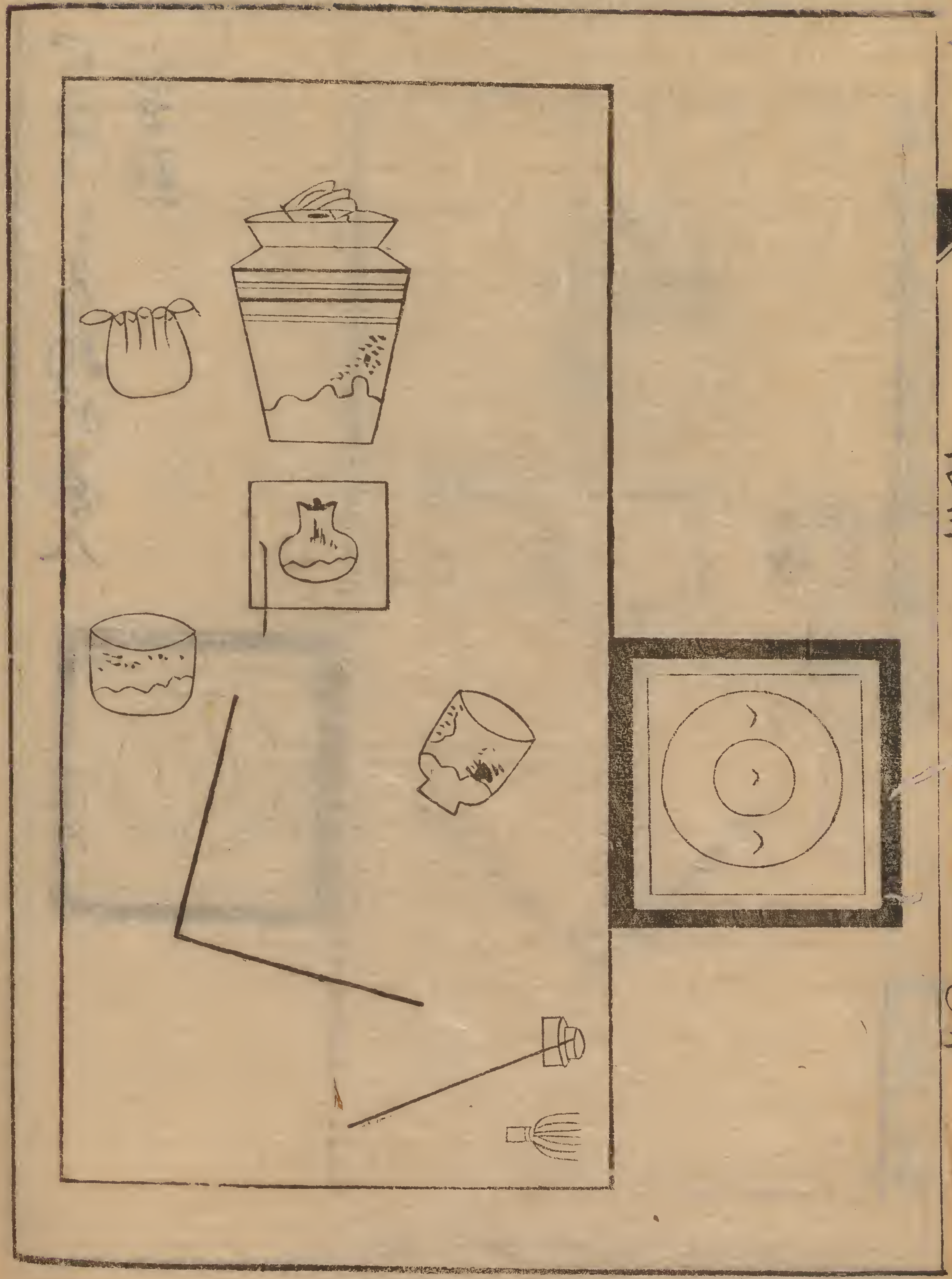
797 .E5c
7046

小倭壺茶通若紊惻憪萱墨習

阿色てこし名物茶入
多聖筵





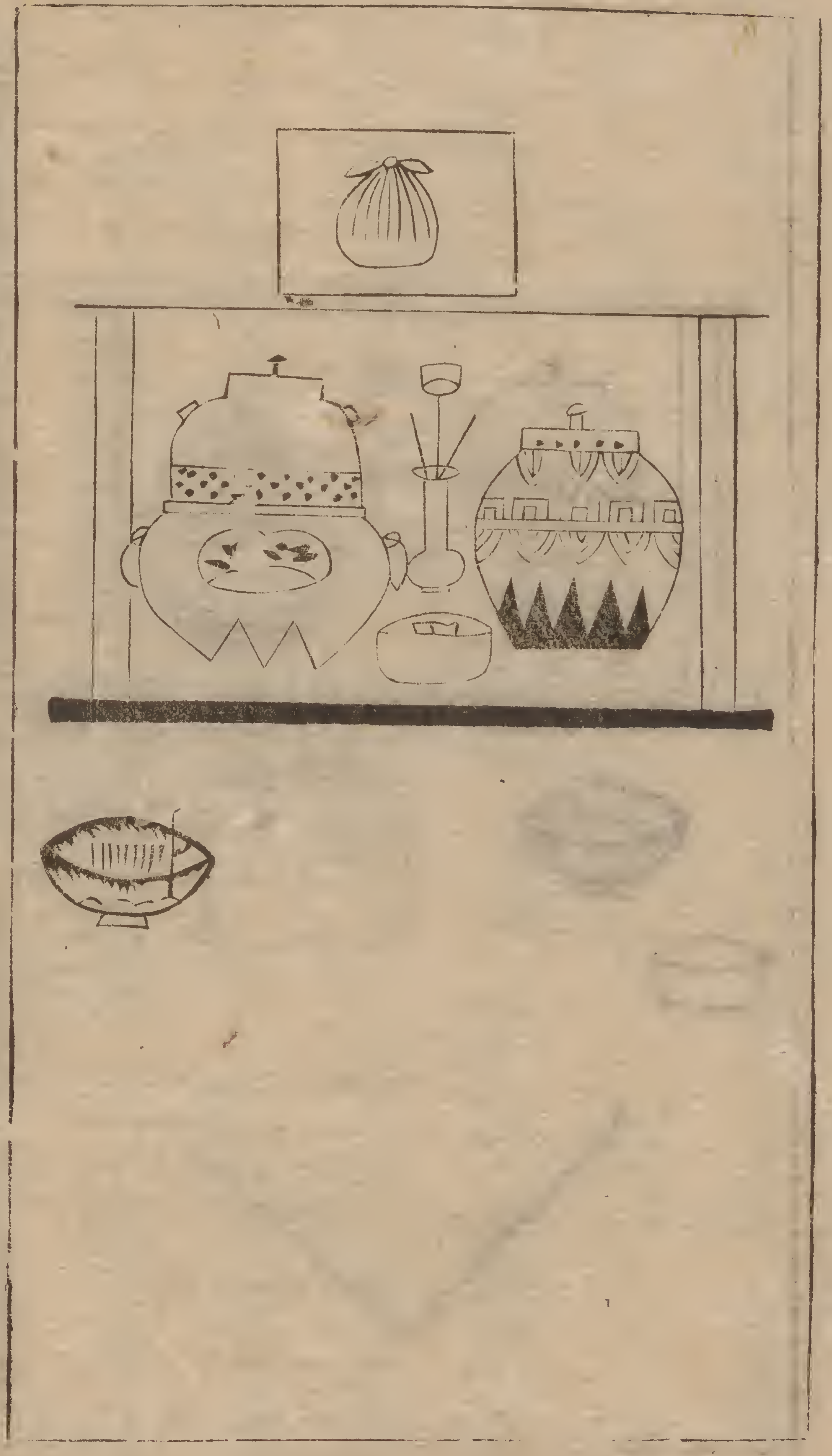


一四畳半名物持にて茶入袋ある人の
あしらひ盆を置とも常のごとくなれど
先茶入に仕ひ置帛紗(フクサ)にて打払ひ置の
ごとく置くべく茶入を取て余り袋なる
帛紗を取出し常のごとく仕かけ置
を仕ひ茶杓にてかき帛紗にてかへし茶
入の方へ居すり茶巾を三つ也中へ上茶入
取出し又帛紗の上小盆袋は口かさね
を並べ置乃上を置し袋なる帛
取出し仕ひ帛にて懐中(クワイチウ)してたゝみて

茶入袋よりあかし常のごとく置し時は右の入
むつひ仕ひ帛紗(ロウ)ゆるめ入と云はあれども是
云ふなく茶入のかたち常の帛紗の
あらし

一大振なる盆の茶杓の置所ふ取掛(ケツカウ)
なる所あいしらいにいたそもの事なれば茶
入拝見(ハイケン)仕るべしと云ふ盆をもひげで
御開なく取て云ふ又は茶入向く
乃茶入よりは開るかくなし今日お
しやると云又帛紗を取茶入を茶ふくさ

真の臺子両漢の盆點



ゐしおろかにひは付のよろしきは須
あつくゐ侍らふて能く立之
一茶碗の茶入と云ふて書上に茶の名あら
茶入ハ茶碗のうちみくも形(ナリ)よき茶の
あるハ古瀬戸(セト)此茶のあるハ本窯(ホンガ)の茶
入なり品(シナ)文(アヤ)ハ傳多し
あり如しい茶入の形にそれくの
茶を付の事あるしなきなり
茶碗の盆點とも其作法(サハウ)よく
こまかにしるは書一つあまたり

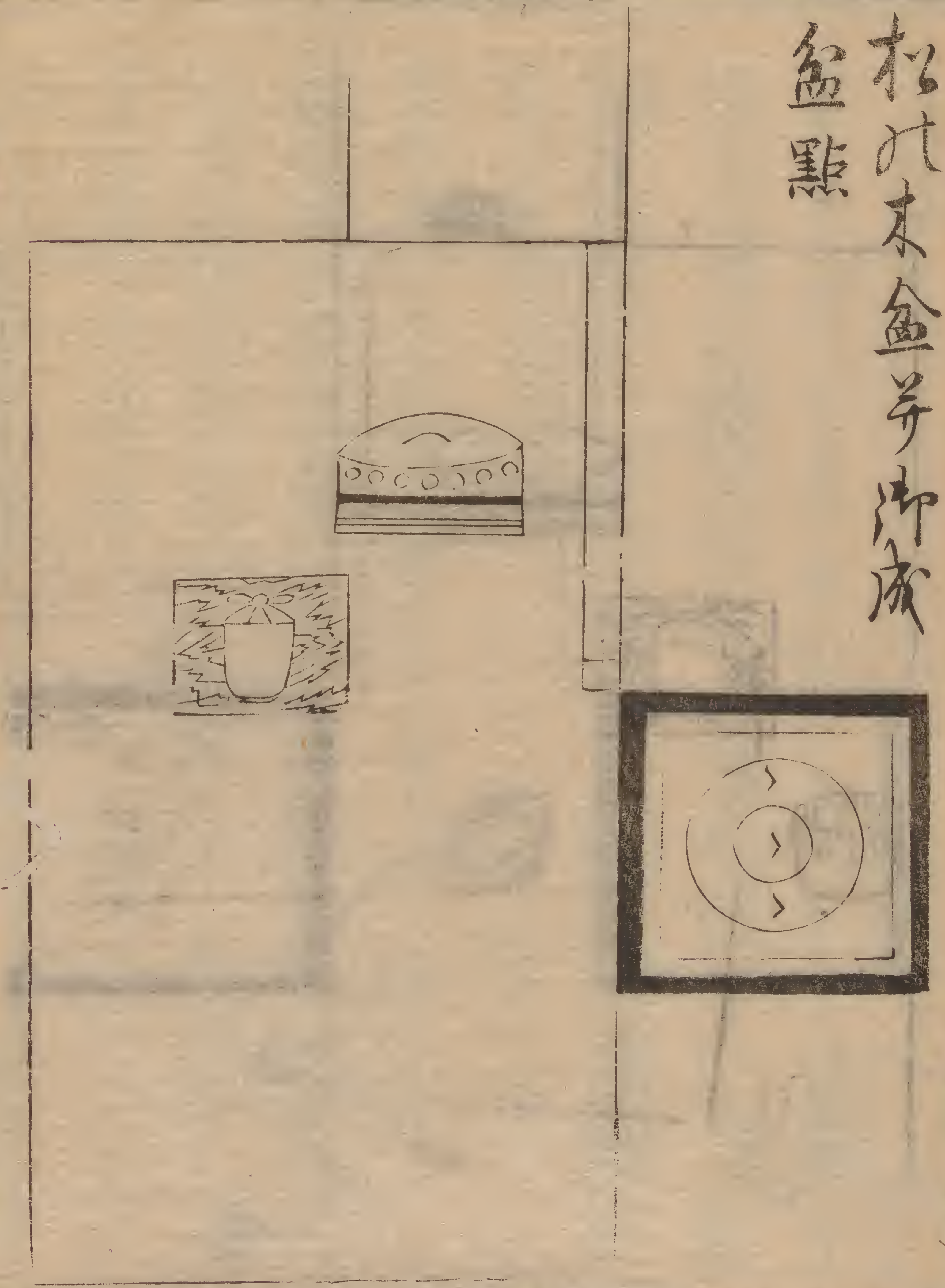
一両漢しらる茶入唐物の内にかくも
茄子(ナスビ)文琳(ブンリン)丸壺の外にてせよ人の
知らる茶入又ハ古瀬戸の内にて
も人の知れたる中古乃内にて
も本歌の茶入盆にて前深座(フカザ)盆ハ
宗旦(ニゴ)所持乃盆ハ底抽にて瑕(キズ)たゝ
盆とも漢の無蓋にて飾之
一天井にかる盆茶入ハどこかに下(シロ)し也
常點かけたり光茶入ともりく
口かきとらふ絶ことさらも揃乃

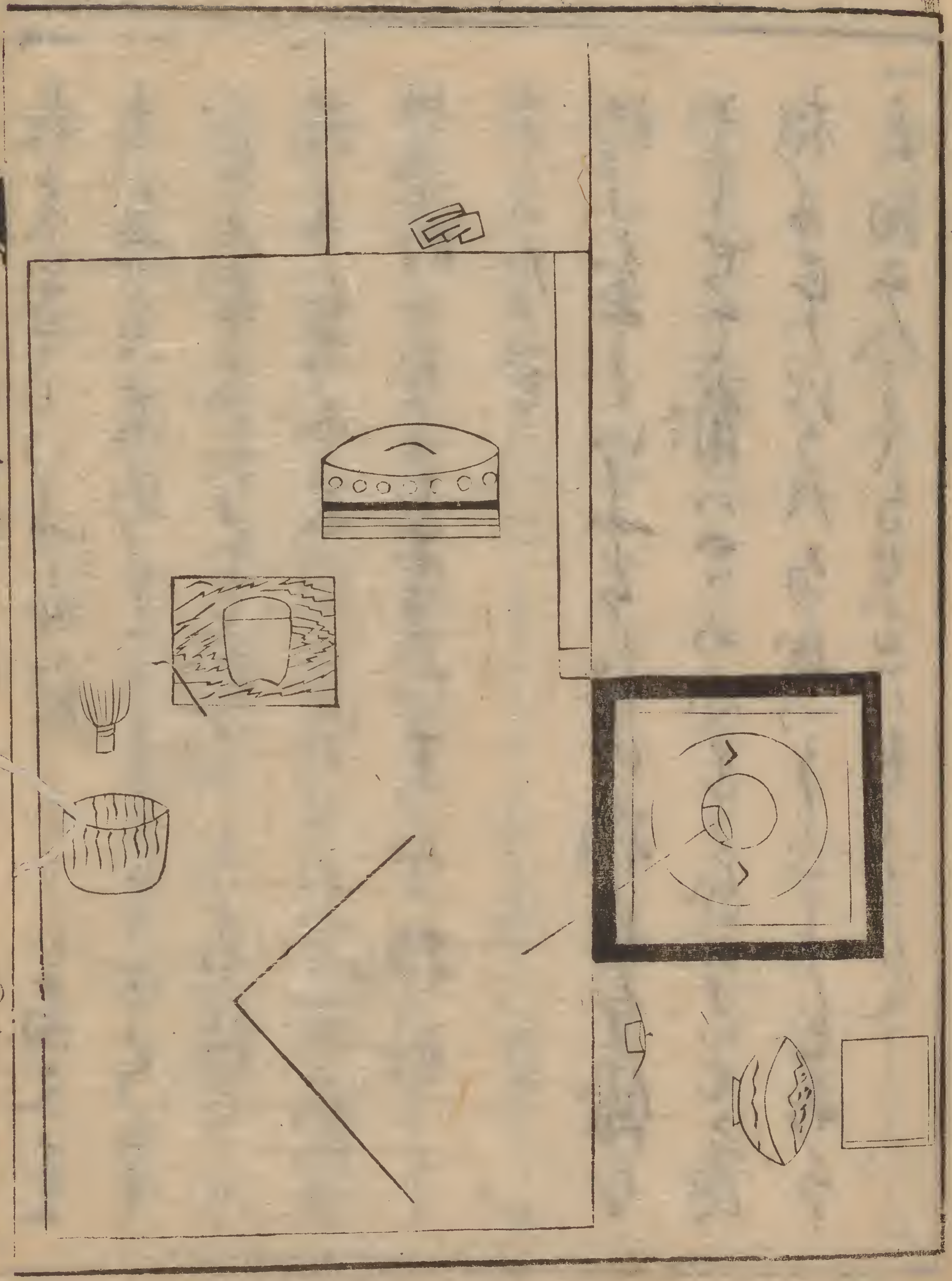
一ことにしても物に扱損すゝ帛を包みて
常のことを始くさし先盆を始むへし
扱損ゞよ棗(ナツ)し帛ハ損ずなるにて茶
入を袋たゝまれく中にて茶入ね
出しかみ棗袋多のことく天井へ上
帛をさばんし中ハ帛ハ懐に入たよ
て盆にまかへし茶扱を仕中ハ帛乃
まして盆にまおく盆にかなきものを
盆點にかくる事なし
一客座ハ茶入を袋にいれて釣(カリ)河よ

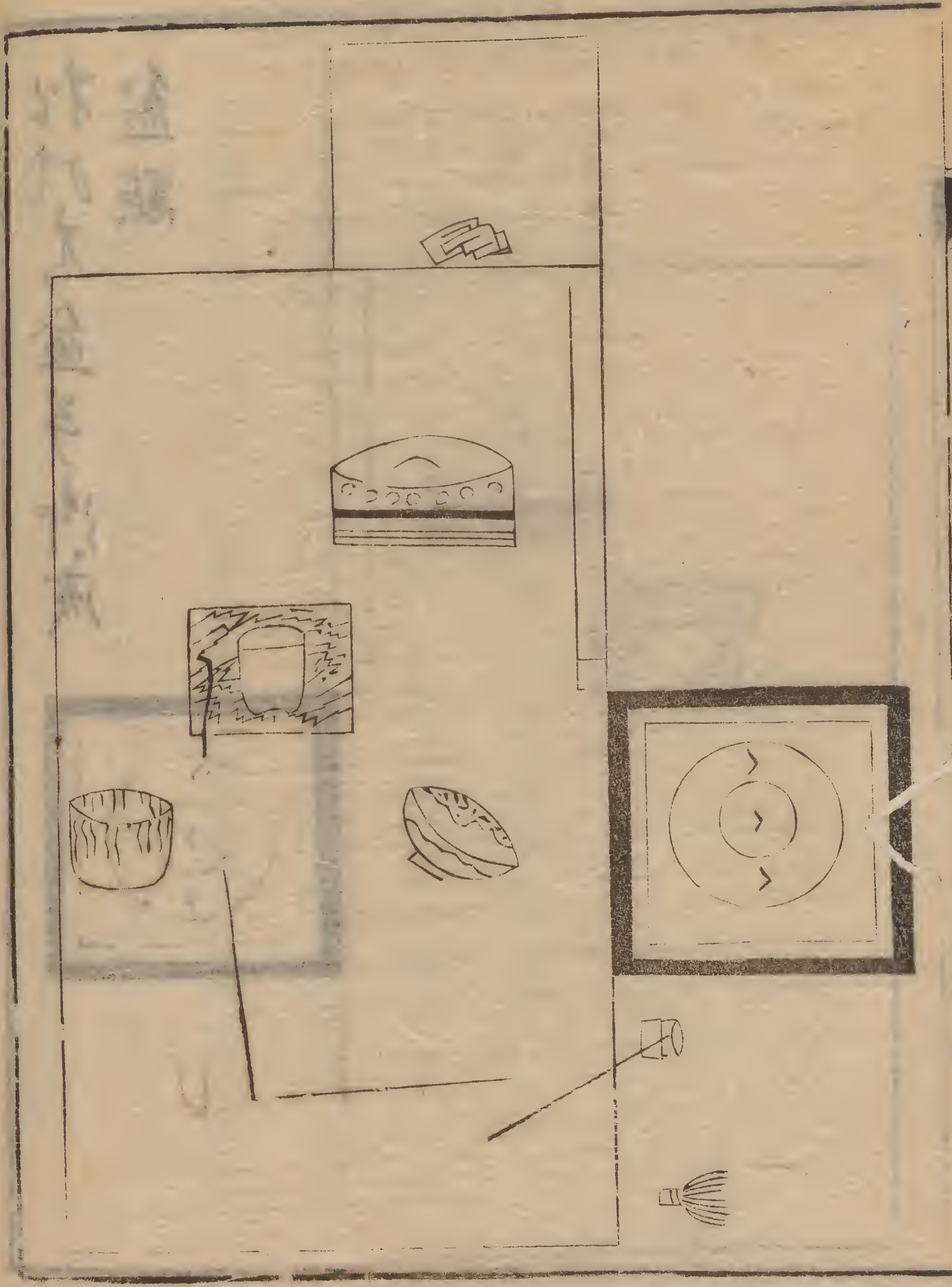
いさゝ人の見る茶入ハつねに心してあつと
感じ愛し亭主も此袖を帯のうちに
なしも御それなりともありへし扱ぶ指
の道とする時先規よりの法様なる
法度名物別の猶賞翫御茶入を法
おすゝめなどいふていひ出下なとにわ
ハ仏間あかく色よくうしろて茶入書の
しく申ひ出せ色し家の色とも
かくれと云ハ用しく申ひ出さへし此時
ハ袖をとりんなり

茶入をいつれ都ともなハ名にしおふを
大漢と見くころへてあつか
袋をハかぶりとめるく添く侍る
色ハかんあくありし前そ
又なりかあつとかんする心かれて
あつかひ入あるそていはんとへし

松ノ木盆并御成
盆點





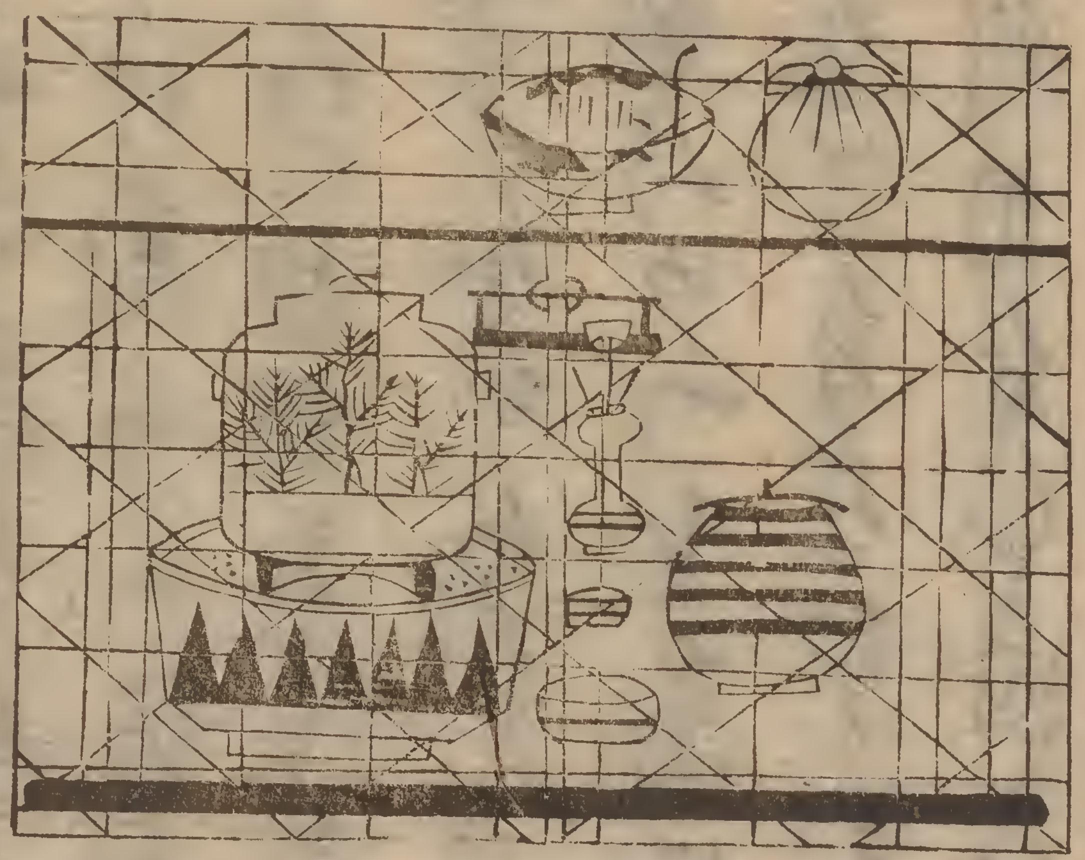


一 松木盆といふハ板この一寸之壹
木盆ハ木のよくゆかみなきとくなる
盆に用る事なり 式正ハ木地なり
右の盆に木同をぬりしぼりしき
めにぬりたるを 春秋のまへを板同より
出るなり
一 蓋盆といふハ松の板同を組合
そゝせて角ハ四めにきをなるをなり也
板にまきこれらをつゝけんとあそ
にて出入まてなくてハかなしさかし

一 御成の時志つらへに茶入のくさらの人ハ
こゝろよくつく来て書院盆をおもしく
山茶碗點の事也 来て夫れ中に入る
様をこなへ持ハ下のた盆と申し
大かく来て此のたへしあかハ茶入の
盆たてよく／＼書かし
一 松木盆乃ちさきハ利休もて
ならば茶の事あり
一 家据ハかならずしたかし右の時代も
今ハ先へし盆ハ先にかしらも

古き臺乃木盆なとハ足のも低足
直置にすへし
御成なとありし比唐袋入
臺乃木盆へのするかひそ
松乃木の盆にいさみ乃飾をつけて
木のめあしらふへしにさき成り

御成網結臺子封改氷室之圖

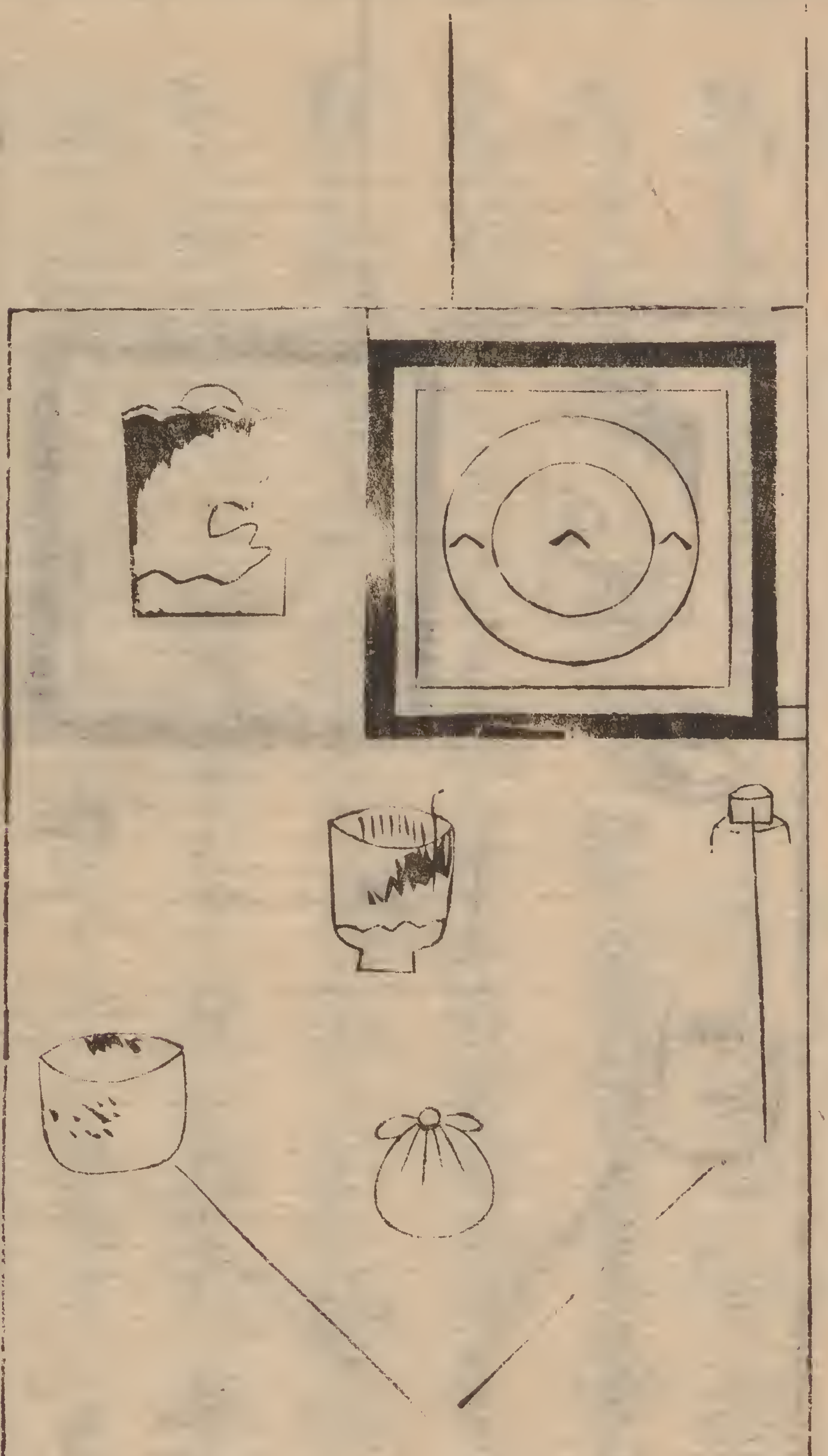


一 澗急の甚子にて御成の前にて急かゝるに
甚子を荘る事甚るあらは守るより
志りけるをハ皆西方へ開やうにめ
志りけるうちの蓋を三中にある
ぢやうをあらためへし封緘しるにて
御家の内つもを当日ニ来る人ニ封
を先て自る蓋を御茶を點るニ
内剝自分を同ゆへし日の今へ
ある封を切る浚漬を附る御茶
を點る蓋を致る公の御目ニかけ

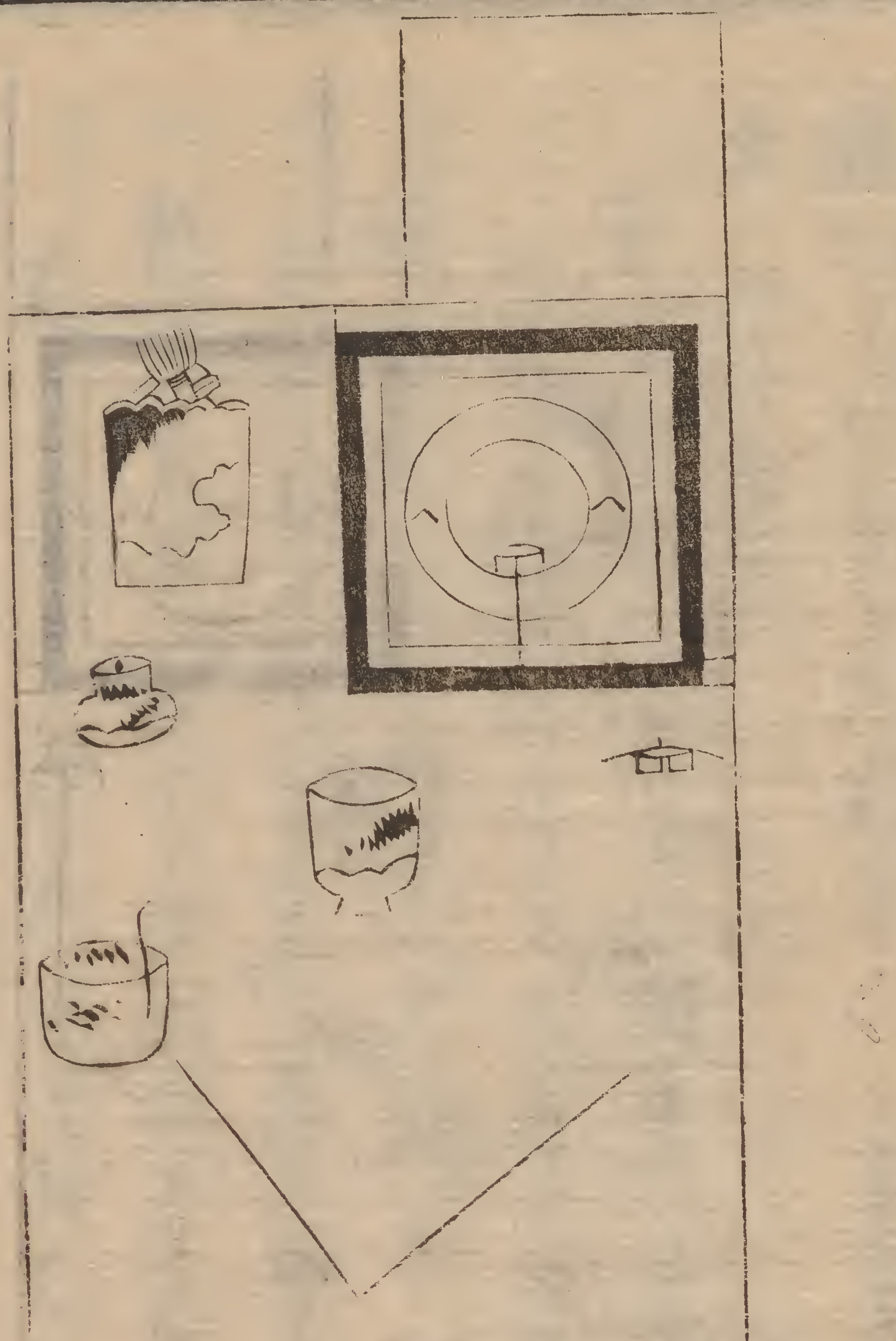
一 あるくの法形を申を
水を入てはるにて御成の当日に二方
あるく七条水を二三而にて置よ也
御用つもを充漬水めて改めやるに
竹の筋を拭彼水を入て紐て置て
其中ある竭紀のを御茶の水
と空む叔茶ニ一てい火をつるく
してよくせんし備お焼の壺ニ入
置置し当日入置とらへ立へこ
其を備おやさへ毒とさるとや

後へ一なをし又水さしをもとの所
をいふなり
あしかけ乃壺より八椀ほど入て合て
おすりの内乃ゆるしなりくり
水定おるりのまへの淵(アレツ)より
なみあつめをくみより珍てあそ
月ふりきて鉢(カロ)こゝを水のとゝほる
左さ茶をくゐんしてそおく
武士乃(モツノフ)つとつ治门のゐりまてわし
お菜の水ふたよりしといふゐれ

老人曰濁水上様之習



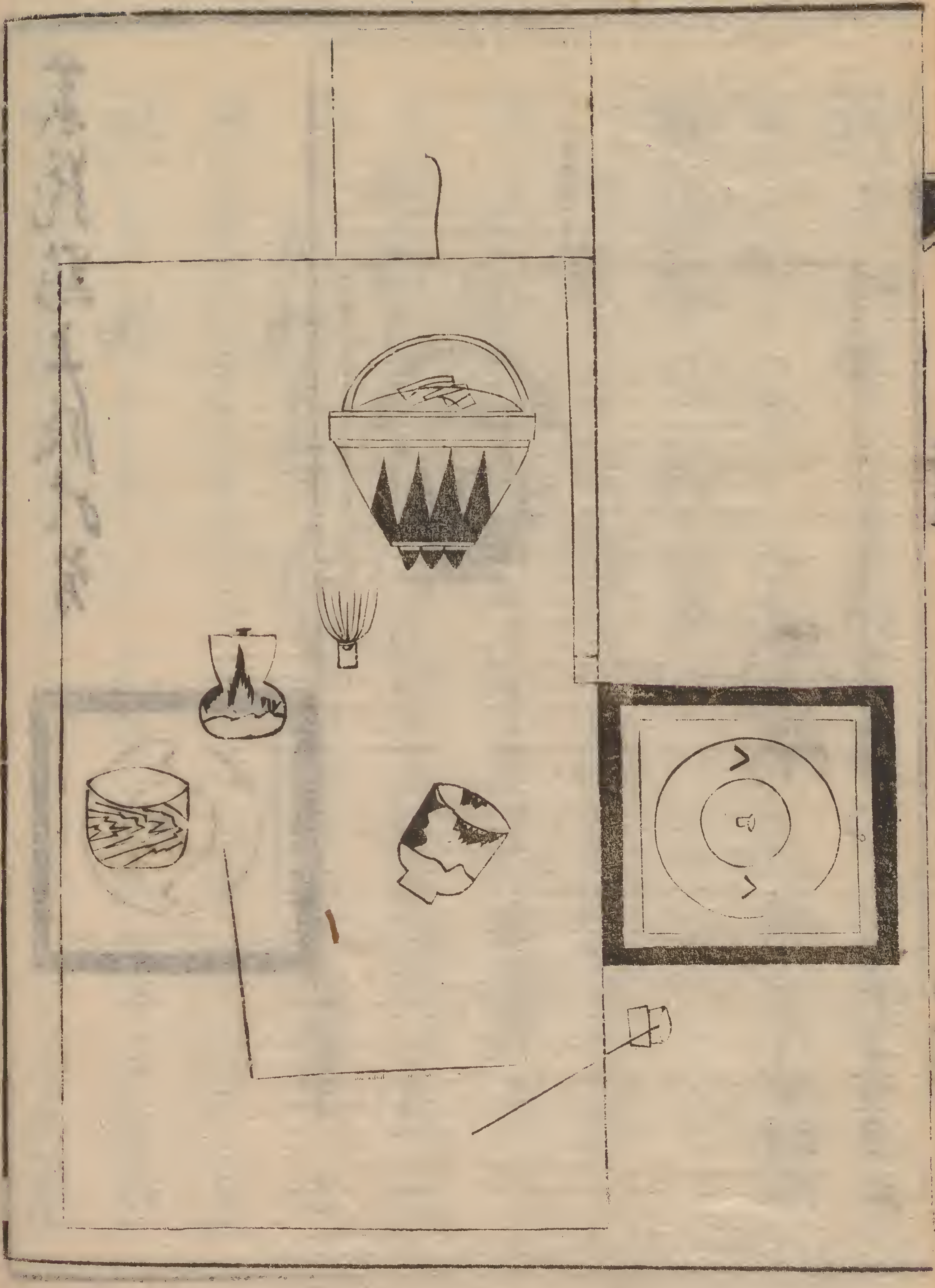
一御茶を點るまへにハなに事なけれバ茶
濯(スヽ)く湯を汲し、(コボ)茶碗のあたゝまりて後
置事もあれバ、ところへ入る茶碗をとり
さかさに中へ膝(ナラベ)を付置なりまた湯にて
あらためてよくなをその茶碗をしめ茶
杓を蓋(コホシ)に置事もあり棚にのれバ
それへよき茶釜をおき、上にあげ置申す
をもつあり茶入とならべ置事もあり
湯すくひを置、よくしく茶巾にてぬぐ
ひ又湯を入その内まはしあらひて湯を捨



被也入置て手あらく御あつかいよろ
しからずさるしそのふりた時の
機嫌よくいたす也
一茶がすくなく湯のつよきハそのしるく
ていしゆのげんをみんがせめて
一茶はこくして湯のすくなきもいかん
これみなていをつよくしかけ

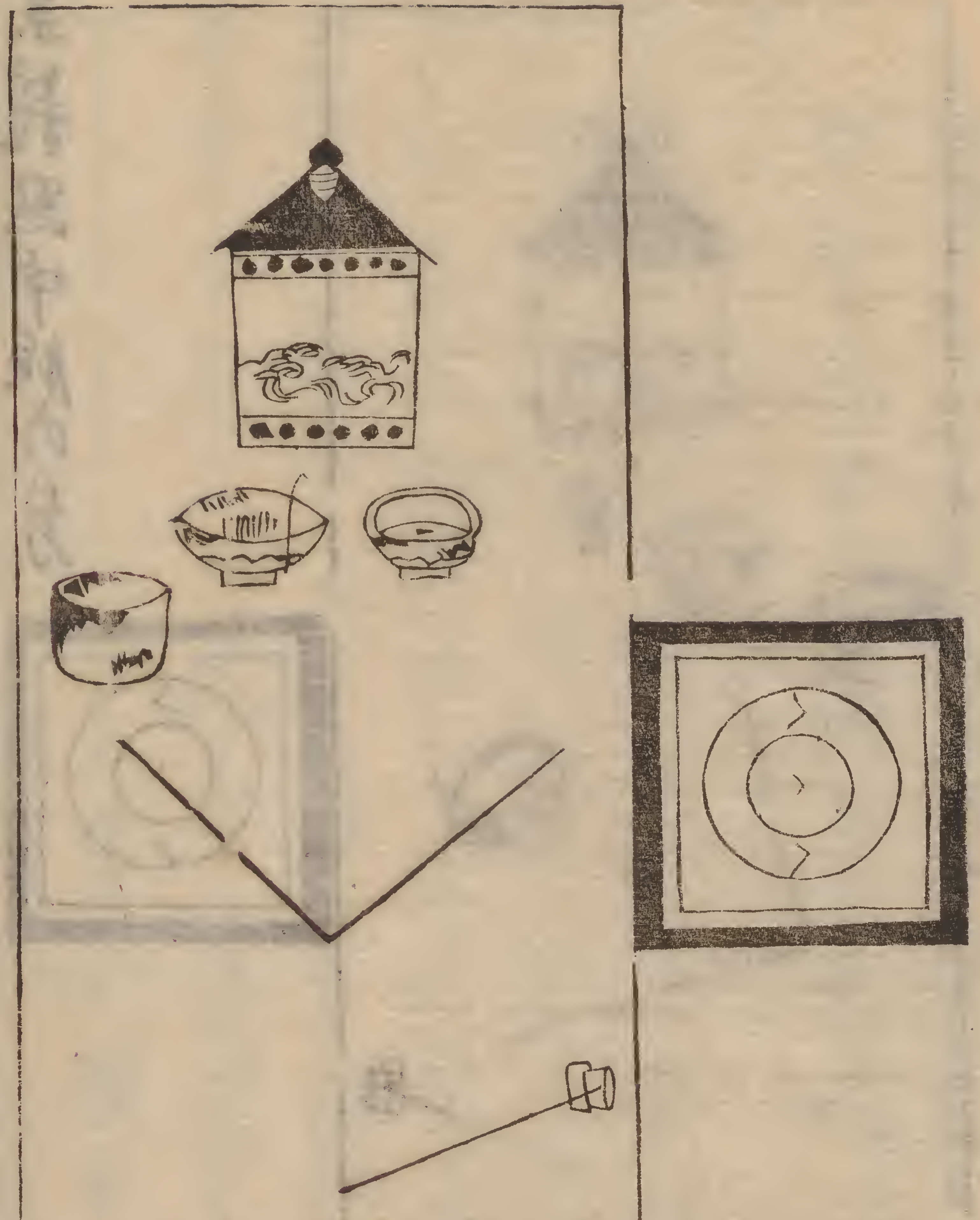
茶筅點上飾此圖

一座敷に茶入を持出る事あらハ盆も
なしとおもふ時ハ茶碗點にする
なり茶入の扱盆點の心にて
棗とも茶釜を平所へさし持ゆ
にする茶入は大かた初へおきあらき
上段に心ゆ茶杓と棚ようら
なる茶入の蓋はすへて茶杓を
置しるのみへかかりようらし
やうらかくこにひなおして所作されへ
所作は御さされて心得らるへし



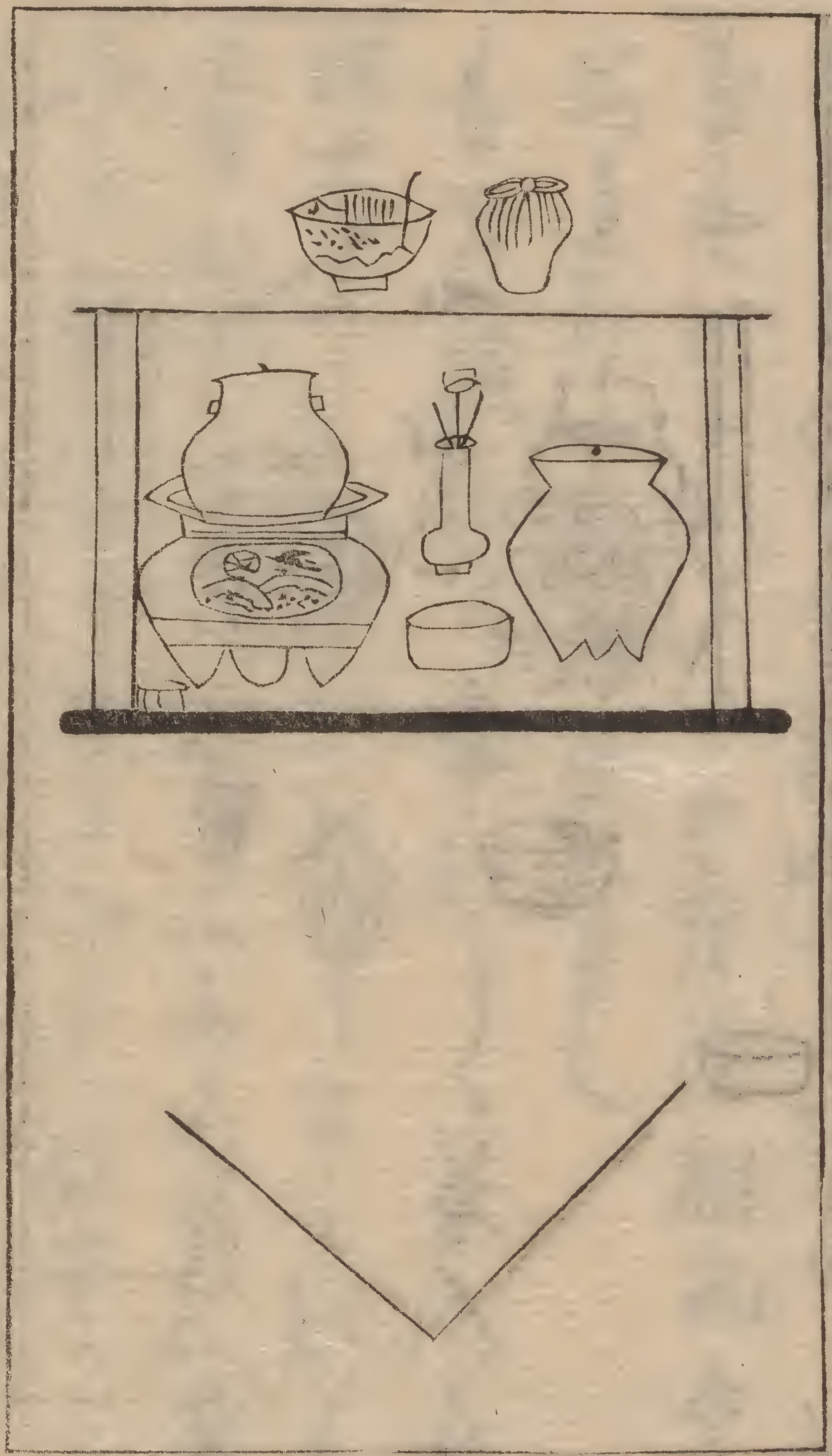
上中下三のしなあり口受あれハ
右ほとの事も師にならひて見へ

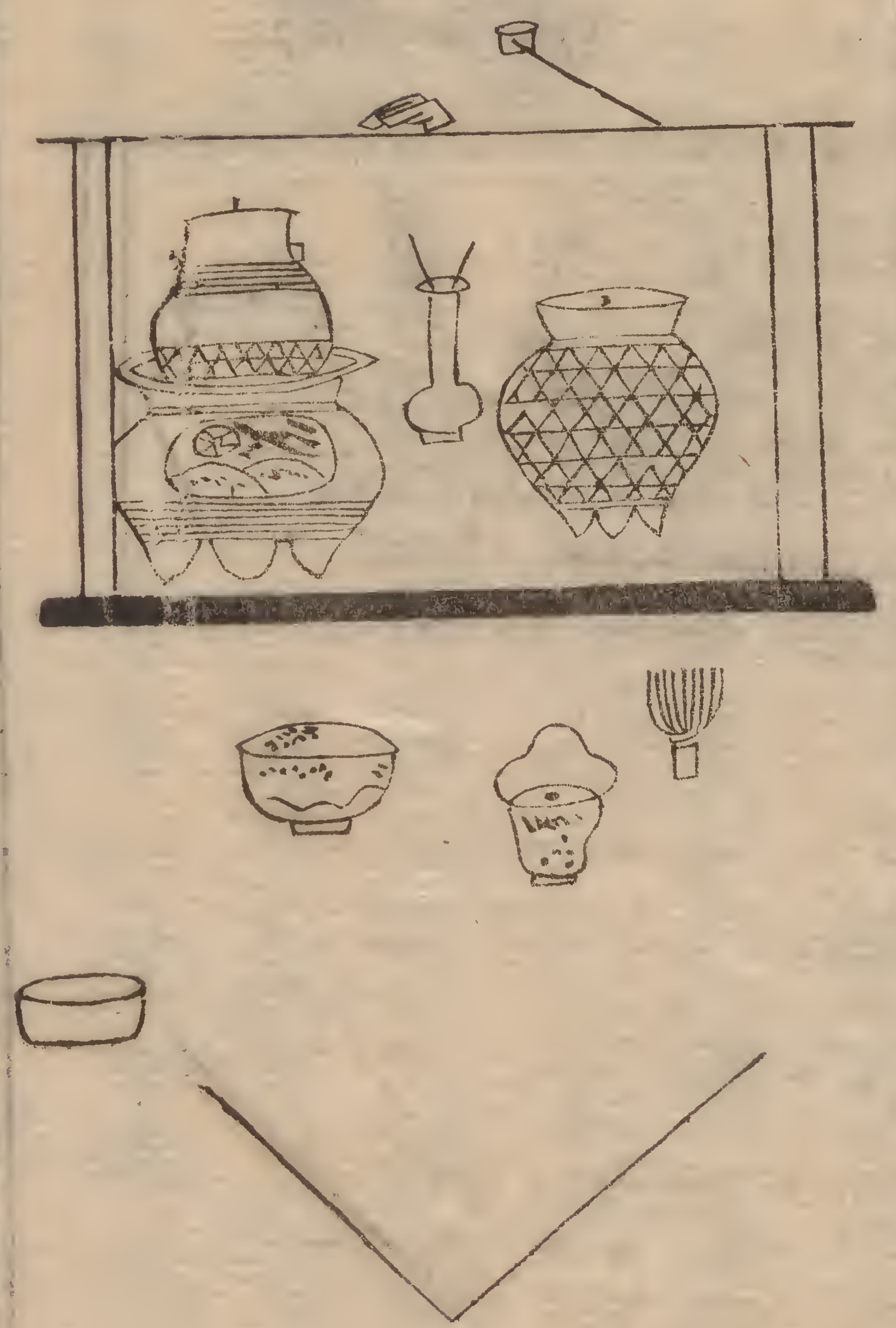
茶籠點中卓の図



一此茶入を弦付（ツルツキ）といふ底糸きり湯地
古瀬戸あるひハあかつきのなりもあり盆ニハ
もちゆる時ハ蓋を一枚蓋にても
又とんすさにもする又ハ割蓋（ワリブタ）
にもする茶杓組紐を作るか
茶入をならべて茶入を大あつかひ
なりとも茶ハたつる所も先茶杓を
とりて茶碗よりかに扱茶入を先に
するなり口傳

茶籠點下段の図



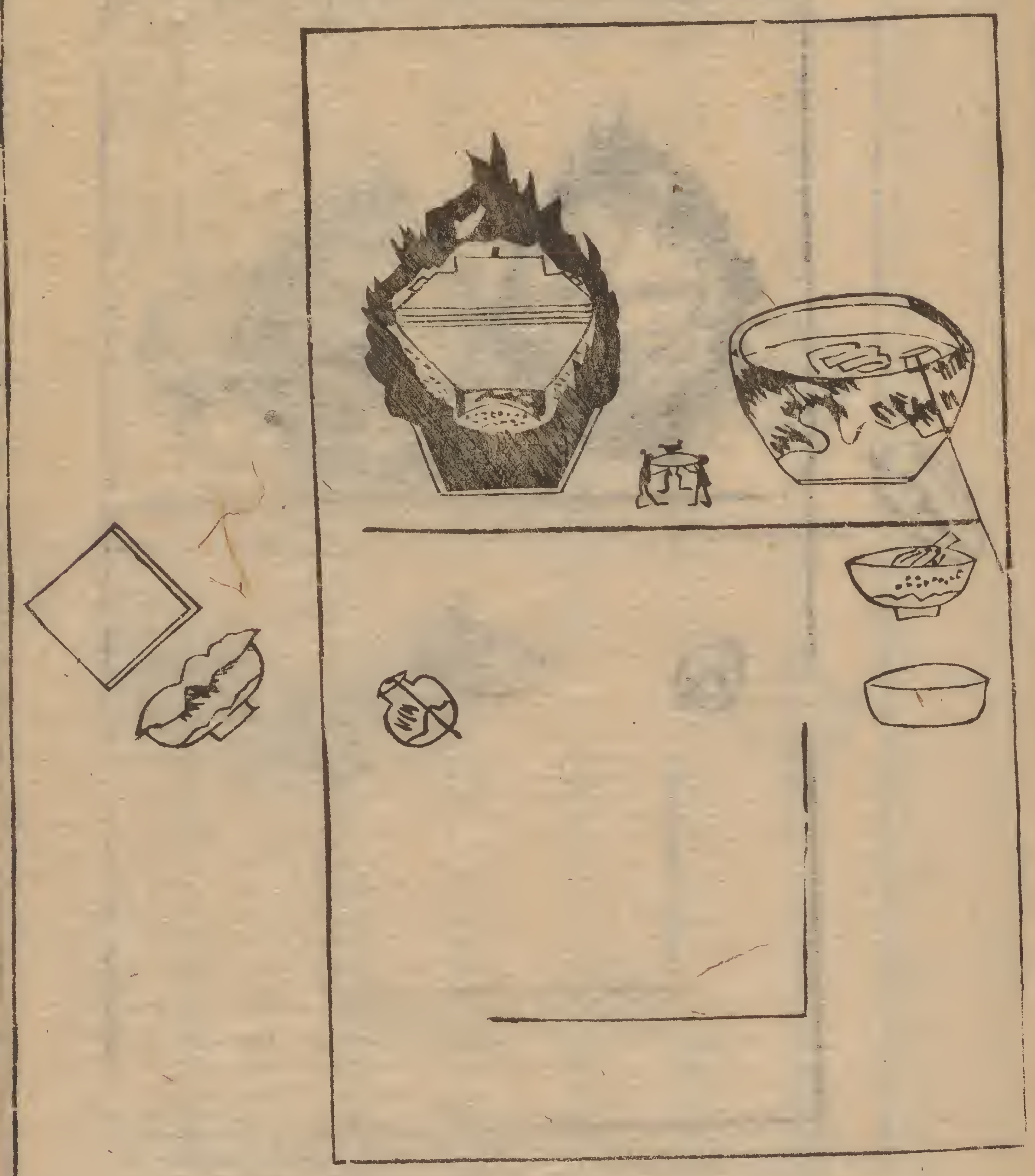


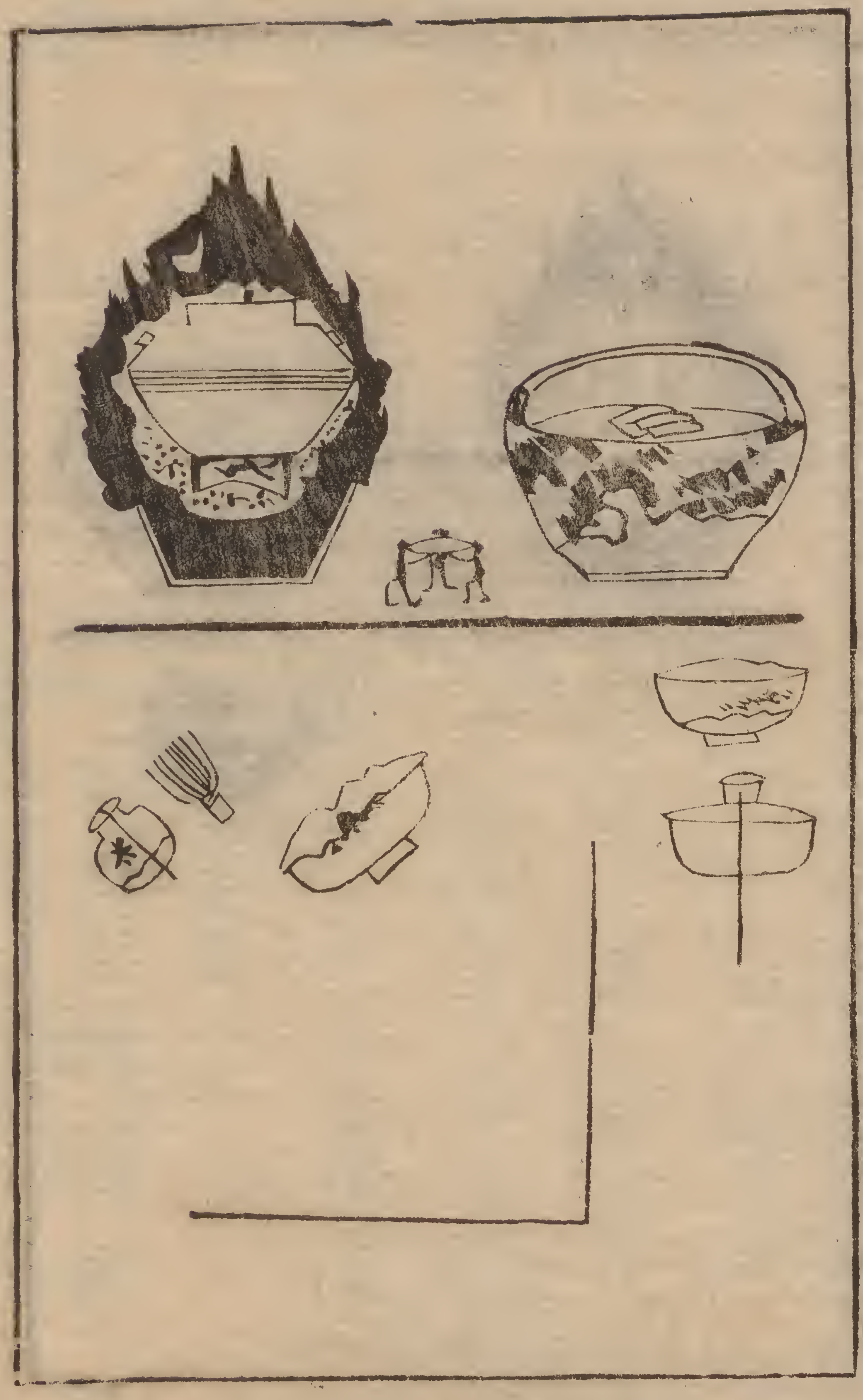
一此茶入ハ波瓶とて一ヶ所ニ湯をなを
あらためのうへ蓋乃口ニ弦付同
事也此三ツにても庭湯棚にて
ならふべきもの也

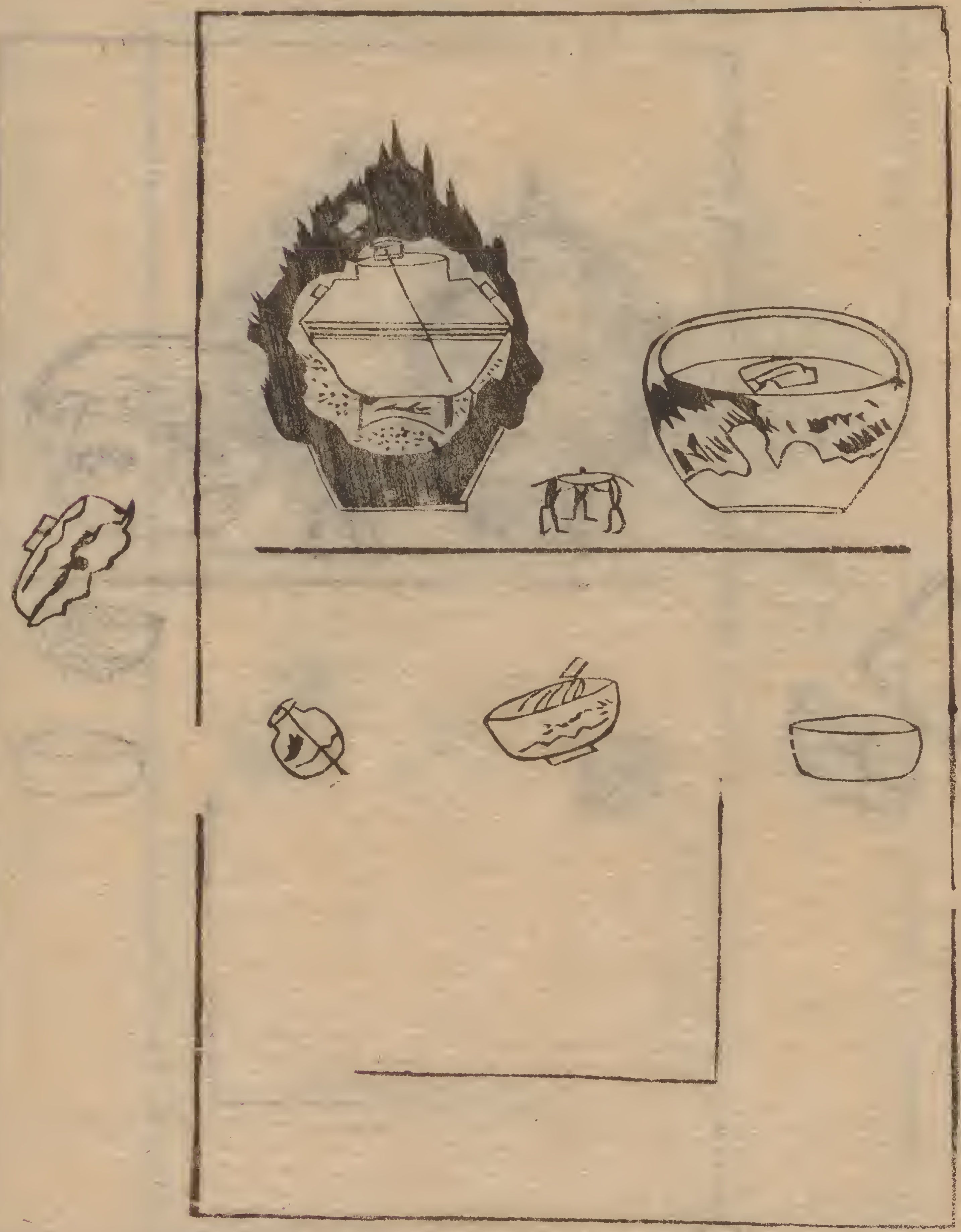
一しほの點様ハ常のごとく茶入れ
置方のごとく茶杓入れかへりこほし刷を
しほめぐく茶入おろしへよく／＼吟へ茶
入れ刷毛を出へべし此所ニて
よふ中下乃ゑかゝめ置ことわりを招くなり
生めくんあし茶入にて作くこ所

乃方又品あるへきこと秘に傳ふ

長夜風炉重茶碗點の方







一此風炉ハ名ある風炉と云 仍あそびを
見ことたりしほのくものくしとかさ帽の
方ハ宗しかきやを立く ありゆへ
早くまへし 甚よ所をきらひなき
本名ハ平付あく 舎(クイ)備(ヨウ)とそうのあ
いしいかなる 劉盞乃何しハあを取
く あみ寺とてうけ 後をあまりて四へ
?く あみ重て立つくるなる盞盞
ハ三人唐よりきたるを 世よりこれ
家と云 志う盞 足と此方乃あつまて 八

天目の茶盞を候て給仕して
一點(タテ)茶(マウ)ハ湯のとき茶碗に手をそへ
有にあ盛ひしやくうけもち鑓(ニシリ)よりあふ
居まてまはして茶入をとりて袋をさば
きして茶入茶乃ことく遣し茶杓
巾ひかけ茶盒なしへ茶をとりて茶碗
手にもちてより出し茶巾にて茶碗
へよ茶盞を出し入盒乃茶盞をとり
置し而しく湯二杓入盒
盞し次湯乃ことく茶をたてまつ

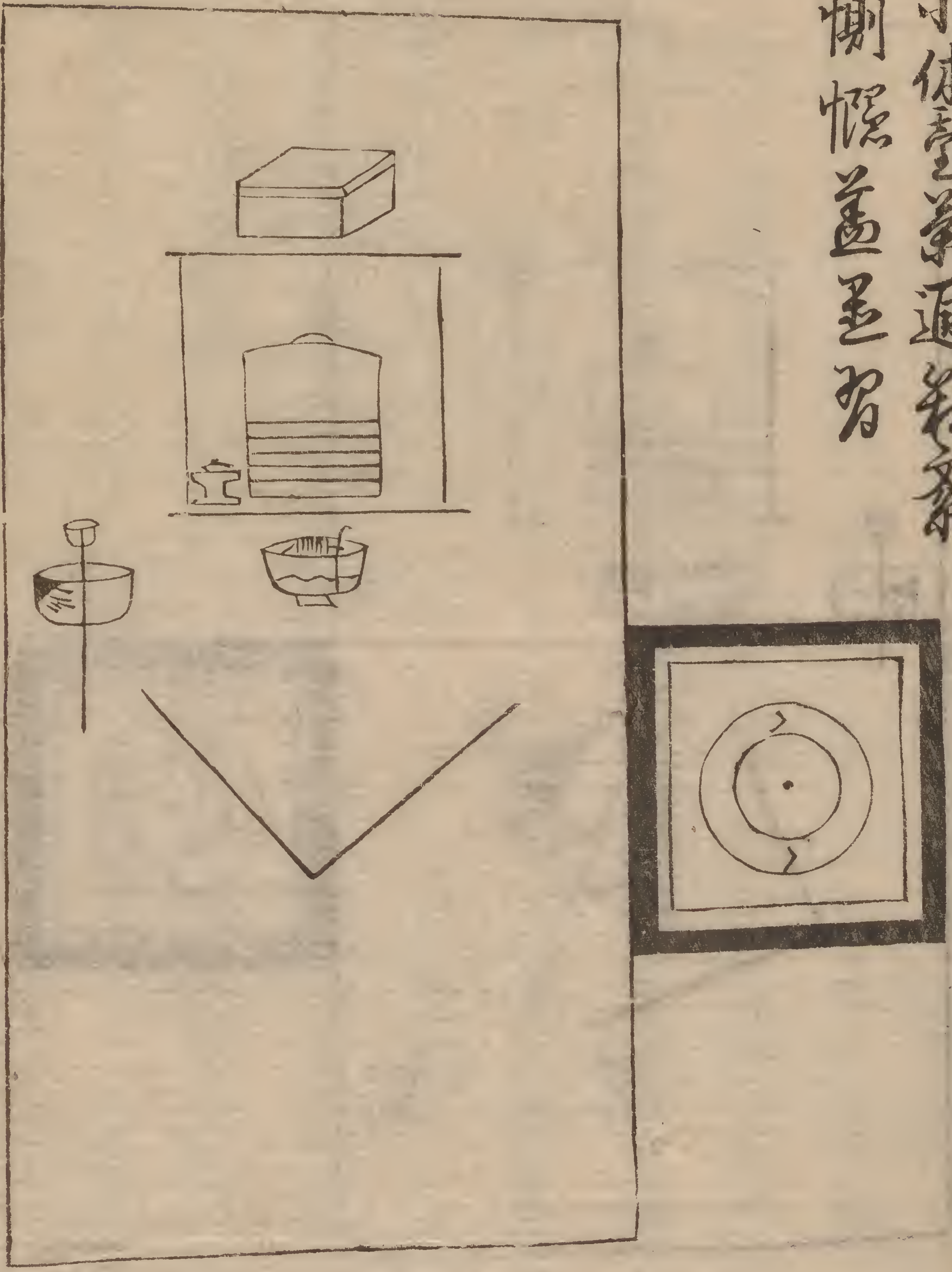
茶碗をそれの盆のうへにおくとき又帛
すく釜乃蓋を取湯二ツ入釜ふた
をせずしてかへする茶碗ハその蠅
乃上にをきてある茶碗を洗ひ湯
を二ツ入釜乃蓋をし先記しておく
のしかうあるはそれより常のこと
おのこし茶をあてさまの茶釜と
まくおる盆上にのる茶碗のふかば
ふへしく茶碗とぞ蓋帛にくるみ
へお取釜の蓋をしめ茶碗とおろし

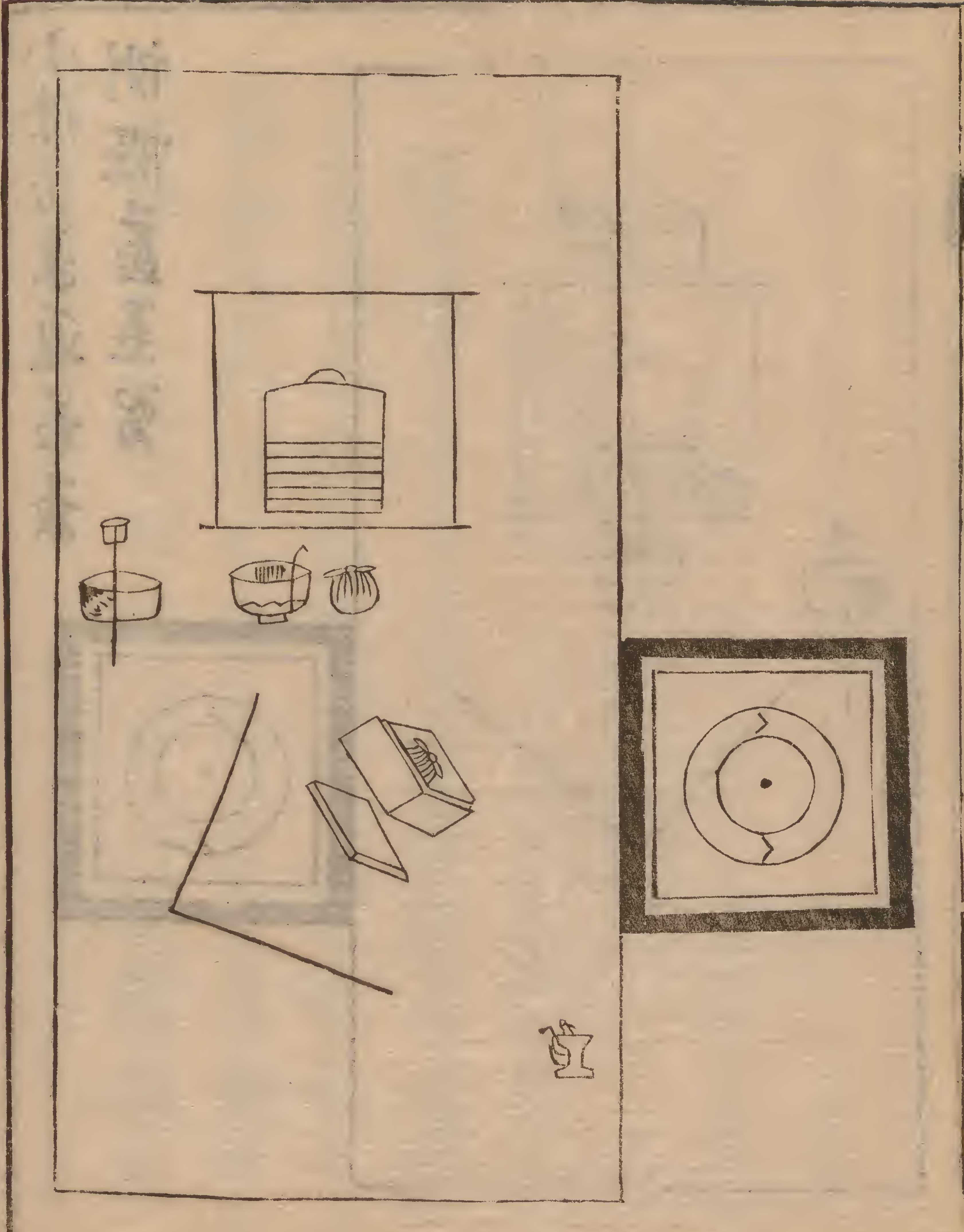
さらくとぬりし之を取常乃ことくに茶を
點るなり又帛を出し茶碗ともに
盆にのせて中仕廻すにかへしの
茶巾盆をそのをさゝへし先奴茶
碗取てる湯をこさせてきて水盆
乃上におき記乃茶碗かへかけて
おく湯すこし茶せんにてよくすゝぎて
あさおろ之茶筅のとく茶碗をも
盆に出し乃こととく茶おく茶入
いそぎて茶碗にかけるべし

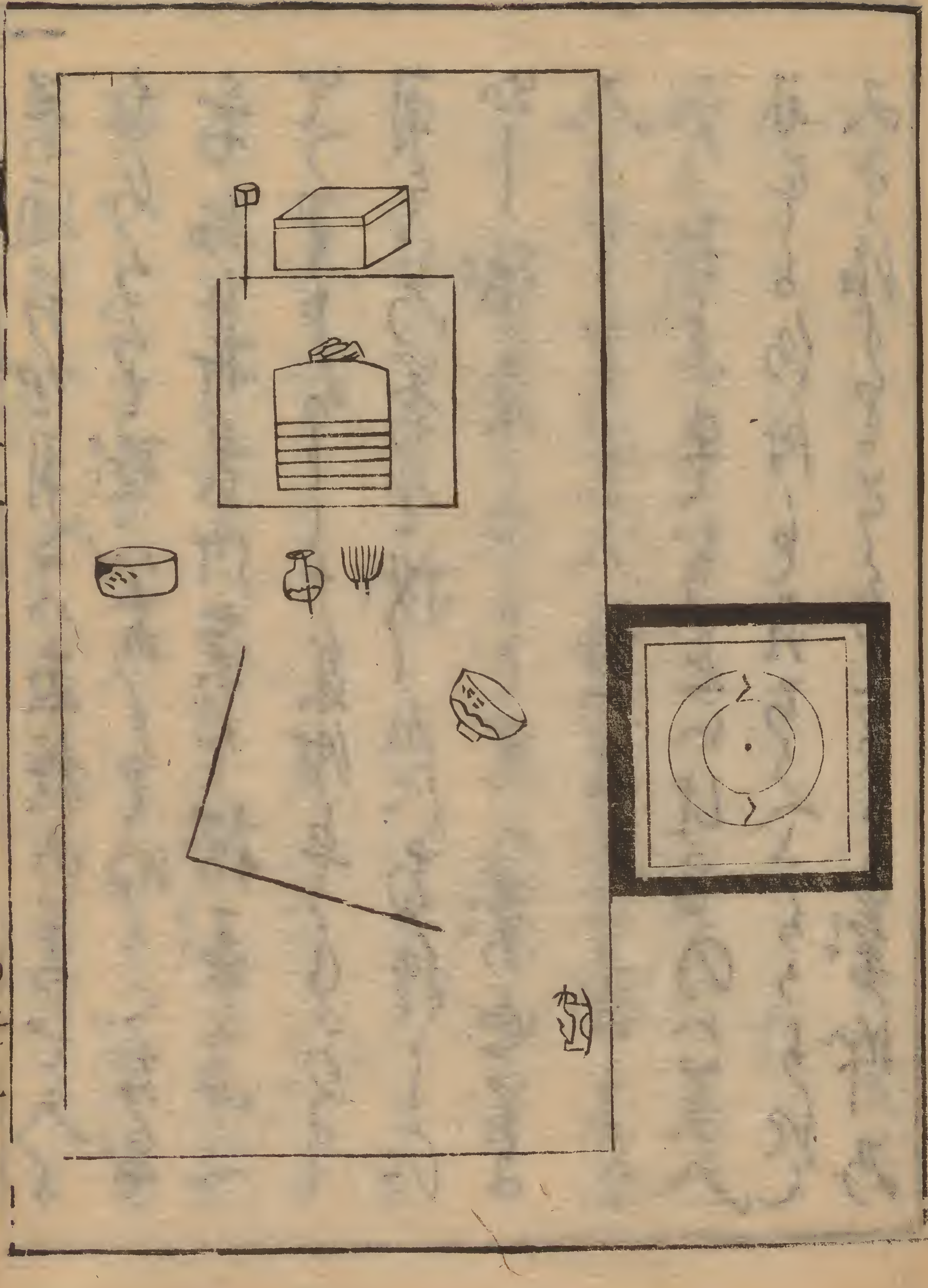
一重ね茶碗といふハたとへハ客十人
乃時ハ茶碗二つにして二ふくたて
なからハ六人七人まへくらゐ一服ツヽまはす
為し
一客振（キヤクブリ）といふ事ハ上座の方にて濃茶
二ふくめをたつと又人へは跡
乃茶碗と用ゆへくは跡服より上座
も二ふくめ乃茶碗とも上座にて飲と
上座より猿図（サレヅ）まて出し半座へさし
出すハなりとまハする跡をのみ

切よろしく茶入袋茶杓ハ一見にふか
又出し帛紗を上座乃方へおくは客乃
茶碗古門にかへりあとまとくはいか
ともに座乃功者（カワシヤ）乃入事也
重（カサネ）茶（チヤ）わんちややせんとつけてある故
こし湯とつきくしまする為かして

小低臺茶通右之茶
棚棚蓋置留







一茶通箱を用るハ客様の茶を入ら
ゐあるとき譬ハあるしのこのミに寄
京ほとハ折衷所茶を挽置ハ中へ
いつれも事なしや東附さてもあかすも
用る乃茶を挽しそれに客様より
出し振舞なるとも思ハ茶通箱より
入りなるを茶入試のふたるつゝきを
これ持参東なをハけするのハ茶入
本さるに付ても後ちつへふうように
又宇治なるとこゝとすく茶師乃

こて客様の付たる茶通箱菱皮
箱に入る事し象箱乃よく横ゝ
あゝ思ひたまふとよく大のあいさつ
をなし點まゐらするとき先棚に置ひ
箱をも下し箱れてよく拭ふて後より
大名乃茶よりと初む茶入にあ
し茶碗となし箱の中にあく
茶入とも中へいせあれてよく蓋
をもらかさ蓋一乃あまりおきたる
よふかしかのくもあハ常にかくりす

す一點仕廻茶入を出し炭ハとく
なる時は炭をして持出て
又菓子を出し其後にて手水
出る也又出てハ其のごとく
茶菓を點する事同じ
一菱（ヒシ）皮（カハ）籠（コ）の事和と同事なり
一側（ソク）樽（メニ）乃蓋置とて井筒の上に
小児ののせたる形（ナリ）なり棚（タナ）に茶
器と人形と向の方に置出し
其の茶人取合置り答状置

置上へしも黒ぬりの器を
横にして器のしく置見ゆり
それを其一の書もしるなり
茶（チマ）通（ツウ）箱（ハコ）茶入ふたつならべ
點（テン）法の事ておひおくへし

茶湯　三之巻終